



地質調査所の創設と変遷

(映像展示室)

今井 功 (地質部)

地質調査所は来年(昭和57年)創立100年を迎えます。この100年の歩みを1目でわかるようにしたのが 標本館に展示されているプレート 題して地質調査所の変遷です。標本館の玄関に入って左側に映像展示室があります。この部屋のスクリーンに向かって右壁面に取り付けられている横3.6m 縦1mの大きなプレートがそれです(写真)。プレートの最上部は「年号と所属」欄 その下は「地質調査所沿革」欄 下段は「主な調査研究業務」欄で 右から左へ 過去から現在へと目で追えるようになっています。この年表をそのまま本誌に載せることはできないので そのうち特徴的なことがらを拾って紹介することにします。

「年号と所属欄」には 107年に及ぶ年号が横に長く刻まれ それにあわせて地質調査所の所属の変遷が示されています。内務省時代の7年間を除き 農商務省・商工省・通商産業省と 地質調査所は通産省の歴史とともに歩んできました。所属を大きく区分すると 全期間の約3分の1が鉱山局時代 他の3分の1が外局として独立したり各部局に所属したりした時期で その中に地質局時代(明治18—23年)も含まれます。残りの約3

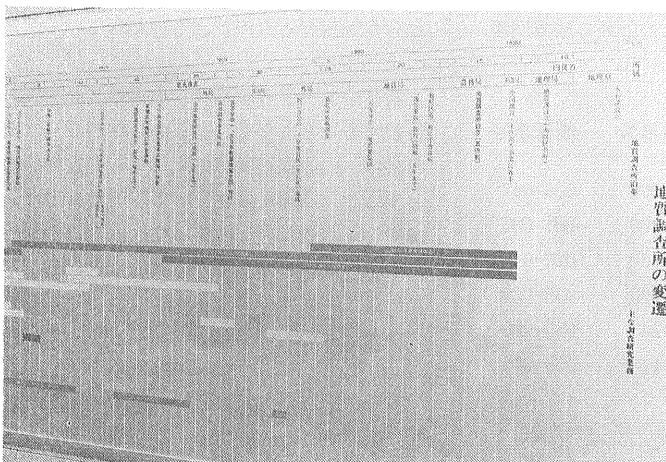
分の1が工業技術院時代(工技庁時代を含む)です。

地質調査所の沿革についてみると 創立は明治15年ですが その母体はすでに 明治11年 内務省に地質課が設立された時にできていました。これは 明治7年 内務省地理寮に設立された木石課を改組したものです。

庁舎は明治11年に赤坂区葵町にできてから 明治18年に麴町区道三町 明治39年に京橋区木挽町 昭和21年に川崎市溝の口 昭和54年に現在の筑波研究学園都市と4回移転しています。その間 大正12年の関東大地震と昭和20年の空襲により2回焼失しました。

主な調査研究業務についてみると 地質調査所の業務は 当初は地質調査と土性調査の2本立でした。明治38年に土性調査事業が農事試験場に移管されてからは地質調査を主軸として業務が進められてきました。その代表的なものは 1/20万 1/7.5万 1/5万の地質図幅調査で これは創立の時から現在まで 縮尺は変わっても一貫して行われています。そして その時々 これらの成果を総括して 各縮尺の日本地質図や日本地質産誌などが編さんされました。創立7年目の明治22年に1/300万日本地質図が 17年目の明治32年に1/100万日本地質図が完成したことは 驚異的な成果といえるでしょう。

この地質図幅調査以外に 地質調査所はその時々の方針や時代の要請に応じて 多くの調査研究をしてきまし



映像展示室にある
「地質調査所の変遷」
のプレート

た。戦前では油田調査・炭田調査・鉱物調査・工業原料鉱物調査などが代表的なもので 戦後は地熱・工業用水・核原料資源・海洋・地震予知など領域の拡大と研究の大型化が特徴となっています。これらのプロジェクトを遂行する上で 多数の近代的機器も導入されてきました。

こうした調査研究業務の流れを追ってみると 大正12年の関東大地震と昭和20年の敗戦が 大きな断絶をなしていることがわかります。事業の拡大と縮小の変転は政治・経済・社会史をそのまま反映しているようです。

現在の標本館も 地質調査所 100年の歴史の上に成り立っていることを どうかお忘れなく。

人間は地球の姿をどのようにとらえてきたか

— 移り変わる地球像 — (第1展示室 地球の歴史)

今井 功 (地質部)

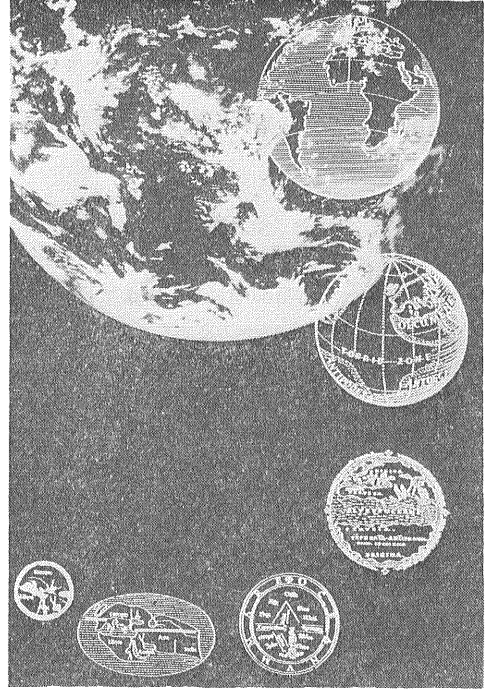
標本館の第1展示室の入口に 世界最古のアミツオーク片麻岩が飾られていて 人気をよんでいます。その左横にある大きな画像には 大小6つの地球が並んでいて これにかぶさるように アポロ17号がとらえた地球の姿が点滅しながら大きく写し出されます(写真)。

ところがこの画像には何の説明もありません。そのためか ちらりと見て通り過ぎる人も多いようです。これを作った目的は 展示室の内容を象徴する「地球」のイメージを来館者に与えることにあったわけで あえて詳しい説明をしませんでした。しかし よく見ればおわかりのように これは古代から現代まで 人々が地球の姿をどのようにとらえてきたか その変遷を示したものです。

左下隅の小さな円は 紀元前550年頃 ミレトス(現在のトルコの西海岸)のヘカタイオスが描いた恐らく世界最初の世界地図です。当時 大地は円板状と考えられていました。オケアノス(大洋)にとりまかれた丸い大陸はヨーロッパ・リビア(現在のアフリカ)・アジア(中東地域)に分けられ 大陸の中に地中海があります。

その右の楕円形のは キレネ(現在のリビア北岸)の学者エラトステネスが紀元前200年代に描いた世界地図で これにはヨーロッパ・アフリカ・アラビア・アジアのほか イギリスが描かれています。インドの東はまだ未知の海洋でした。

その次のコインのような図は 中世のスペインの大司教インドルが描いた世界地図で きわめて模式化して



移り変わる地球像

いますが 大洋に囲まれて丸い大陸があり これが地中海・ドナウ川・ナイル川によってヨーロッパ・アジア・アフリカに分割されています。

中世には人々は地球について様々な想像をめぐらします。次の右上の図は イタリアのマクロビウスが15世紀に描いた世界地図で 東西に伸びる大洋を境に ヨーロッパ・アフリカ・アジアを含む北半球の大陸と これに必敵する大きさの南半球の未知の大陸とが対置されています。

その上の図は 古代・中世の人々が画いた地球像を後世の学者が球面上に投影したもので 地球には4つの大陸が対称的に分布しているという中世の仮説をもとに エラトステネスの世界図のほか3つの仮定大陸を配置しています。

大航海時代から未知の大陸は次々と発見されていきました。世界地図は刻々と現在の地球の姿に近づきます。一番上の図は 大陸移動説の先駆者 フランスのスナイダーが描いた アメリカ大陸からアフリカ大陸を分離させた図(1858)です。有名なウエグナーの大陸移動説が生れる半世紀以上も前のことです。

このように 地球の姿に関する考え方は 古来 いろいろと変化してきました。そして1972年 アポロ17号はついに地球の全貌を写真でとらえました。偉大な科学技術の進歩といえるでしょう。